

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 210号

2019年10月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (10)

第11講 まさに知るべし、ロマ書10章12, 13節により
称名する者、決定往生するを (その1)

稽 古

稽古というのは古いことを考える。「稽」という字は『大言海』を引きましたら、「考える」という字です。古い真理を考えることを稽古という。我々は稽古が足りない。稽古が足りないから、ものにならない。何事も稽古しなければいけない。

平凡な生活の重大さ

最近の『よろこび』に書いておきましたデビッドソンの言葉に、「よく送られた平凡な生活は、最も偉大なる行為である」という言葉があります。人は、変わったことが偉い・偉大であるように考えますが、私はいつも言うのですが、シュバイツァーがアフリカの土人を助けた、あの偉大なる変わった行為のみを褒めますけれども、我等は日々、普通の自分のなすべきこと、自分のなしたいことではなしに自分おなすべきことをなすという、平凡なるなすべきことを怠っている。

自分のなしたきことではなく、なすべき事なす

イエス・キリストが最後には、自分のなしたきことをなさずして、なすべきことをなす、最も難しい十字架を選ぶ道をイエスはお取りになった。イエスは、逃げようと思ったら逃げられた。ところが、自分のなしたいことは困難を逃れることだけれども、なすべきこと、神の御旨をなすというこのイエスの偉大なる行為の勇気の根源は、イエスが30年間大工をやった、その間にその勇気が養われた。

平凡なる、平凡に見える日常の義務を、自分のなしたいことではなく、なすべきことをなす、神の意思をなす平凡なることをなす、平凡なる神の意志をなす訓練が、時至らば、偉大なる十字架を担うの決心の力となって現われる。力が問題です。己に勝つ力が問題です。その力は、日々稽古して、毎日の生活に於いてその力を稽古する。

平凡なる人生

平凡なる人生。ここで決まる。人間が決まる。立派な人になるのには、代わったことをする必要はない。

今日司会者が読んでくれましたが、イエスは「重荷を負う者は、われに来たれ」、そして「私に学べ」と、「私のくびきを取れ」と。「わがくびきは易く、我が荷は軽い」と言われた。我々も日々、皆、荷がある。くびきがあり、荷がある。これを本当に軽く、易く、魂に易きを得て、我々は日々、これを担いたい。

私はこれから生かしていただく間、本当に、易きくびき、荷は軽い荷を負うて、心に平安を得た生活を送ってみたい。人に教えようという意志は毛頭ありません。私はそういう人生を送ってみたい。

私の信仰の標語

私の信仰の標語を申し上げます。私の基督教の凡ては「このままで、わが主イエスよと称えるに尽きる」、これが私の基督教の標語。いつも言っていますが、私の基督教のすべては「このままで、わが主イエスよと称えるに尽きる」。

たびたび申し上げます通り、私は第1回のロマ書講義、昭和36年、昭和37年のこれは教会を始めてからもう10年以上たっておりましたが、この第1回のロマ書の講義において、わが主イエスよと主の名を呼ぶことが救いの条件となっていること、ロマ書10章にはっきりと「主の名を告白する、主の名を呼ぶことが救いの条件となっている」という、その真理が分からなかった。贖いだけで救われると信じていた。…ところが、第2回目、昭和46年、47年の第2回の講義のころには、これが救いの一つの条件をなしているということがはっきり分かった。そしてひょっとするとこれが、「主の名を呼ぶこと」が、すべての条件でなかろうかと考えた。最近では、ロマ書10章12節、13節の意味が、原語の意味がはっきり分かりまして、これこそ、称名こそが、救いのすべての条件であるということが分かった。そうですから、こういう標語になった。

そうですから、私のくびきは「わが主イエスよ」と言うことです。
子のくびきは易い。それから私の重荷は、「目の前にある義務をなす
こと」です。

標語が終わりましたが、今度は私の信仰を一言で言えば

生きれば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ね
ば天国、キリストに迎えらる、その時の喜びや如何。

これが私の信仰の告白です。

安らかな人生の example を残してみたい

私は、私の言うことを皆さんに信じてもらったら結構ですけど、無理にお信じ下さることを皆さんに勧めていない。私はこの標語、この信仰によりまして、本当に自分の日々の生活を安らかに、心に易きを得て、安らかな人生を送ってみたい。そういうふうな安らかに送った人生の example、そういう手本を一つこの世の中へ残してみたい。これが私の理想であり、高円寺東教会の理想です。

人に親切にしていく必要はない。自分自身がまず安らかに、平安に満ちた、そういう人生を送って下さい。それが第1だ。それができてから人に親切にしたらよろしい。急ぐ必要はない。力がなければ人に親切ができない、どんなにしたくても。己に勝つ力が無かったら、人に親切はできない。

25年の間に私の真似をする人が2人出て頂きたい

出来れば私は、今日司会者が読んでくれました、魂に安きを得た平安な神のくびき、神の重荷を負いつつ平安な人生を送る、そういう者になりたい。そして、私の死後25年の間に、私のまねをする人が二人出て頂きたい。そういうことを願望している。

25年にもし2人になることが出来たら、そういうことが可能としたら、500年たったら100万人信者ができる。600年で1000万人、700年で一億、800年で10億、そういう人ができる。法然上人が死んでから800年たっている。この間800年。

そうですから、私は聖書の信仰を自分が少しくまねをさせて頂いて、そしてまねをする人が二人、25年の間に出て頂くこと。これが高円寺東教会の理想。

第 11 講 (続き) まさに知るべし、ロマ書 10 章 12, 13 節により称名する者、決定往生するを(その 2)

一隅を照らす

当教会、高円寺東教会の希望で、教えてもらっている信仰は、偉いことをすることではない。普通の仕事を、普通の毎日の誰もの平凡な仕事を、天国を目当てにやるというのが、ここで教えているキリスト教です。偉い人になってもらいたくない、この教会は。普通の人でよろしい。

伝教大師は「一隅を照らす人が日本の国宝だ」とおっしゃった。そうですから、主婦は家庭において一隅を照らしたらよい。それは「国宝」といった。勲一等、旭日大綬章をもらう人が国宝じゃない。私の知人でも勲 1 等、旭日という人は一人、二人おりますけども、それも国宝でしょう。しかし伝教大師が言え、家庭において家庭を、一隅を照らしていると、日本の国の一隅を照らしているということになったらこれは国宝だ。そういう国宝が多くなったら日本の国は幸いですよ。大政治家によって日本の国が幸いになるのではなくして、そういう国宝が増えることによって日本民族は幸福になる。…実際において一隅を照らしている人が大切です。

平凡な時に、後光がさした

法然上人が歩いておられる時、後光がさしたという。弟子の、あれは九条公でしたかな、ある時見たら、法然上人から後光がさしている、ふわっと。びっくりしたと、そんな事を親鸞聖人はおっしゃっていますが、後光がさしたというのは、法然上人が歩いておられた時です。平凡な誰でもやっている歩く時に、体から後光がさしたという。そうですから、人間は我々の平凡な生活でこれが決まる。そういうことを前の日曜に言った。

物事の初めの部分が、最大部分

ギリシアの哲学者は「物事の初めというものがなんでも物事の最大部分だ」と、そういうことを言った。初めというものがそのものの最大部分だと。私の伝道も去年の10月から第2の30年に入っている。30年の伝道が終って、第2の30年の伝道が去年から始まっている。そうですから私の伝道も、去年の10月から今年の9月の今日まで、この1年が第2の30年の伝道の初めの部分。そうですから、今日までの1年の伝道というものは、何年続くか知らないが、私のこれからの伝道の最大部分。そうですから、私の去年のクリスマスに話したこと、あるいは今年のイースターに話したこと、あるいは今日話していること、こういうことが私の最後の伝道の最大部分です。随分私としては大切なことを話しているし、今日も話していると思います。

ロマ書 10 章 12 節, 13 節

ロマ書 10 章 12 節、13 節。これはまた今年のクリスマス・メッセージに詳しく話しする積りです。これが皆さんに聴いてもらいたい場所ですから。ロマ書 10 章の 12 節、13 節は、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶ。このことはロマ書第 10 章の 9 節、10 節では、救いの一つの条件として書いている。すなわち「心に信じて義とされ、口に言い表して救われる」と、二つの条件を 9 節、10 節では言っているけれども、12 節、13 節では、救われるすべての条件として「主の名を呼べ」と言っている。「主の名を呼ぶ」ということは、ロマ書によれば、救われるすべての条件として言っている、12 節、13 節は。このことについてはまた今度のクリスマスにゆっくり話しますが、いかにこれは重大なるパウロの聖書の場所であるかということが分かります。

ロマ書 10 章 12 節、13 節の重大性

キリスト教の歴史においては、ロマ書 10 章の重大性については、古くはセント・オーガスティン、またドイツのマルティン・ルーテル、オーガスティンもこの重大性についてはおっしゃらなかった。また、何遍も同じことになりませんが、現代におけるロマ書の最大学者といわれるカール・バルト、あるいは英国のドッド、あるいは英国のジョン・ノックス先生、こういう大先生もロマ書 10 章の重大性についてはおっしゃっていない。また私の先生の内村鑑三先生も、この重大性についてはおっしゃっていない。

そうですからどうしても、これは日本人、高円寺東教会において、重大性が分かるようにする義務と特権を有する。ロマ書 10 章 12 節、13 節、これは本当に、私の見る所ではロマ書の画龍点睛ともいえるべき場所。大先生方がその重大性をおっしゃっていないということは、誠にこれは天が後から来る者に残しておる場所と思うのであります。

どうぞ、諸君はこの場所を、頭で知るのみならず自分の身に行なって、「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、自分自身においてその深さ、広さ、尊さ、ありがたさを実験せられることをお勧めいたします。

わがくびきは易く、我が荷は軽い

それから当教会の理想の人はどういう人かというと、「わがくびきは易く、我が荷は軽い」とイエスが言われたように、そういうふうな人です。くびきが重く、くびきが難しかったら、そんなものは負えないですよ。わがくびきは易く、我が荷は軽い。「わが主イエスよ」ということは易い。また分相応に自分の現在なすべき事をなす、これも分相応になすことは易い。なぜ易いか。3なら3の力でそのままやったらよいからです。それが国の宝。人類の宝。人類を幸福にする人はそういう人なのです。

そういう人になって下さい。そういう人になりたい。それは難しくない。可能。ここでは難しいことは教えません。私のできないことはここでは言いません。私のできることをここで話します。